

脚本家（映像学科初代学科長）・依田義賢の業績収集・記録プロジェクト

研究年度・期間：平成 24 年度

研究ディレクター：西岡 琢也
(映像学科教授)

共同研究者：大森 一樹 吉川 幸夫
(映像学科 教授) (映像学科 教授)

学外共同研究者：大津 一瑯 山田 耕大 小川 智子 松下 隆一 土屋優乃(緒方んこ)
(映像学科 客員教授) (映像学科 客員教授) (映像学科 非常勤講師) (脚本家・京都造形美術大学 非常勤講師) (漫画家・イラスト担当)

研究補助者：小森 茉季 草野 優二 西條 結実 岡本 匡司 長谷川史歩
(映像学科 シナリオ担当副手) (シナリオ作家協会 講座生) (大阪シナリオセンター 講座生) (データ化補助) (資料収集・整理補助)

《序文》 研究ディレクター：西岡琢也

学校に来て八年になる。

前・映像学科長の中島貞夫氏に請われ、「四年生のシナリオを見てくれ」と言われた。

最初の一年は週一回、四年生の〈シナリオ3〉一コマの授業に一年通った。二時間の劇場用シナリオを一年にわたって指導する。二百字詰め原稿用紙二百四十枚の長編シナリオに、四年生の学生が挑む。

一年目のその年、受講する学生の中に、現在日本映画界でコンスタントに作品を発表している若手映画監督、石井裕也もいた。確実に人材は育てている（と書いたが、僕は石井君を教えた記憶がない。人伝えに石井君が僕にシナリオを教わったと聞いて、慌てて当時の学生用カルテを探したら「石井裕也」の名があった。記憶はないが、記録はあった）。

次の年から勧められ専任になり、週三日、本学に通う事になった。今では二年生、三年生、文芸学科、大学院でひたすらシナリオを教えている。

ともかく映像学科のシナリオの授業は多い。充実している。一年生の〈シナリオ創作論〉から四年生の〈卒業シナリオ〉まで、切れ目なくある。他の映像関係大学や専門学校には見られない。

この充実ぶりの原因は、映像学科初代学科長にある。

依田義賢。黄金期の日本映画界を代表する、シナリオライターの一人である。溝口健二監督とのコンビはとでも有名だが、溝口作品以外の娯楽作、名作も数多い。晩年まで仕事をされた、息の長い作家である。

依田義賢の名前は日本映画史に轟いている。映像学科にとっても初代学科長として、映画で最も大切と言われるシナリオを最重視し、カリキュラム中心にどっかりと据えた功績は計り知れない。

しかし、その名を知っている人は少ない。映像学科の学生なら知るかと言うとそうではない。

残念な事に、世界的に著名な映画監督、黒澤明の作品はおろか名前さえ知らない学生が大勢いる。

『スターウォーズ』を見た事があっても、登場人物の“ヨーダ”の名前が依田義賢その人から採ら

れていると知る学生は稀だ。

依田の創作、業績は多方面にわたる。シナリオ、エッセイ、詩などの文芸関係は勿論、絵の才も発揮され画文集もある。しかし我々はこの偉大で多才な依田について何も知らないに等しい。

だが、発掘され日の目を見るべき作品が多く埋もれている事は明らかである。

本学映像学科の基礎にシナリオを据え、映像を学ぶ学生たちに明確な指針を示したこの先人の多様な作品群をリストアップして生涯を振り返り、その多様な仕事を記録し、学生たちの学びの材料として知らしめたいと考え、このプロジェクトに着手した。

映画は、それ自体が語られる以外、俳優又は監督で語られる事が殆どである。映画作りにおいてシナリオライターが重要な役割りを果たす一番手であるが、その存在や仕事が語られる事は極めて少ない。

依田義賢に遅かりしスポットライトを当てると同時に、シナリオライターが映画史の中で必要性、重要性が再認識されれば、幸いである。

《依田義賢業績・記録へのアプローチ》

- 1 脚本収集・全作品リスト作成
- 2 その他の著作物収集・リスト作成
- 3 人間依田義賢研究
の三本柱を立てた。

1については、可能な限りの脚本を収集・データ化すると同時に、確認されているだけでも237本に上る全脚本のリストを作成した。

リストの項目は、作品名、発表年月、共作、監督、主な出演者、制作会社、備考として脚本の所蔵場所、媒体等である。
(資料1参照)

その過程で「拐帯者」(1937「映画人オリジナル集掲載」)「好色一代男」(1958「時代映画12月号」)など7本の未映画化作品も明らかになった。

依田氏の脚本家としての輝かしい業績については、今更述べるまでもない。日活太秦撮影所の無声映画の脚本からスタート、巨匠・溝口健二監督と「浪華悲歌」(30)「残菊物語」(39)「西鶴一代女」(52)「雨月物語」(53)等の脚本を手がけ、日本は言うに及ばず世界をうならせた。他に一級の娯楽映画「悪名」(61)等幅広いジャンルで活躍、晩年は「天平の甍」(80)「千利休・本覺坊遺文」(89)等の大作をものにした。

2については、依田義賢の脚本以外の様々な著作物等の収集・データ化とリストを作成した。

リストの項目は、作品名、発表年月、制作及び出版社、所蔵場所、発表媒体等である。

(資料2参照)

特筆すべきは、依田義賢長男・依田義佑氏（本学名誉教授）宅より発見された未発表の、【依田義賢・フランシスコポラ共同企画】『ゲーテ親和力による翻案脚色の4篇のオムニバス』ストーリー（未完成）である。現在コポラ事務所と許諾交渉中であるが、日の目を見れば新たな作品の可能性も考えられる。

3については、依田義賢の脚本作法・作品解説・人物像・仕事場など周辺・交友録等多くの人々から多くの貴重な証言を得た。

既に高齢の方が多い現状を考えると、このプロジェクトの意義を改めて認識すると同時に、速やかな研究継続の必要性を感じた。

以下新たに収集した主な著作物・解説・証言・書簡類・アルバム・スチール・制作年譜・本人直筆挿絵・制作イラスト等を列記する。

○作品解説

「近松物語」(1954) 解説・西岡琢也教授 「悪名」(1961) 解説・柏原寛司(脚本家)

「雨月物語」(1953) 解説・依田義賢 「雨月物語の構想」より

○スチール収集(代表作) 依田義右名誉教授協力(祇園の姉妹・西鶴一代女・雨月物語・悪名等)

○依田義賢脚本創作論・脚本作法研究(多数)

○詩集収集「冬晴」「コルボウ詩集」「ろーま」「関西語と詩」(座談会)

○証言(回想・随筆・依田義賢論)収集

依田義右(大阪芸術大学名誉教授) 「父を語る」「大阪芸術大学映像学科設立の経緯」

桂千穂(脚本家) 「依田作品解説」

長谷川正三(元合同通信社長) 「依田義賢との思い出」

井上昭(監督) 「依田義賢と私」

森田富士郎(撮影監督) 「カメラマンから見た依田義賢」(聞き取り)

山田幸平(大阪芸術大学名誉教授) 「スクリーンに夢を託して・映画の職人として」

真田正典(プロデューサー・元勝プロ常務) 「映画『悪名』について」(聞き取り)

奥田瑛二(俳優) 「千利休 本覚坊遺文に出演して」

西岡善信(美術監督) 「依田作品と映画美術」(聞き取り)

梅峰(中国電影学院準教授) 「依田義賢の作風」

○依田義賢対談収集

新藤兼人との対談「ある映画監督の生涯」 長谷川一夫との対談「芸について」

○アルバム(多数)収集 本人及び家族(脚本家以前と脚本家以後)

溝口監督らとの交流芸大時代(宮川一夫・滝沢一氏など)

○書簡類収集 溝口健二と「雨月物語の脚本を巡るやり取り」

○追悼文収集 滝沢一 杉山平一 人見嘉久彦

- イラスト制作 「依田義賢の仕事場とその周辺」 漫画家・緒方りんこ (資料3参照)
- 年譜制作 磯田勉(映画評論家)
- 本人の直筆挿絵(多数)収集

尚、1、2の資料提供に関して、依田義佑(芸大名誉教授)と、社団法人シナリオ作家協会から多くの協力を得た。

又、関西地区の証言、聞き取りについては、松下隆一(脚本家・京都造形美術大学非常勤講師)にコーディネートを、関東地区の証言・聞き取りは、上記シナリオ作協にコーディネートの協力をお願いした。

全体取りまとめは、大津一瑯(映像学科・客員教授)が担当した。

以下、現在における依田義賢の証言収集が如何に困難で、かつ貴重なものであるかを知って貰う為に、関西地区コーディネーターの松下隆一氏の報告書の抜粋を掲載する。

(報告書)(抜粋)

直接依田先生を知る京都の方々というのは極端に少なく、人選も困難な状態に陥りました。思い返せば、勝新太郎さんと市川雷蔵さんでインタビューを試みた監督、スタッフの方々も、この半年内に二名の方が亡くなられています。それに比べて、これは当然と言えば当然のことかもしれませんが、当時の大映京都撮影所では脚本家とプロデューサーはともかく、監督、スタッフとの直接的なコンタクト、交流は殆どなく、名前は存じ上げてもじっくり話をする機会もないというのが実情でした。

私の脚本の師でもある元大映京都宣伝部出身で脚本家の中村努先生にしましても、同じ大映京都なのだから何とか書いて頂けるとおっしゃるところが、中村先生曰く「直接知らん人については無責任に書けん」というつれないお言葉でございました。(尤も、原稿を引き受けて頂けるであろう方々の紹介をしてもらい、大変助かりましたが)

考えてみれば今ご存命の関係者の年代は、依田先生より十も二十も下の年齢の方々であり、当時はもう依田先生といえば巨匠、溝口健二監督の右腕といった印象が強く、そんな偉い人、ましてや脚本家などという人種には接点もないというのが本当のところでありました。

そのような中で、原稿及び取材を引き受けてくださったのが、戦後から依田先生のもとでシナリオ修行をされていた元合同通信社長、長谷川正三さん、元大映京都出身で美術監督の西岡善信さん、同じく撮影監督の森田富士郎さん、同じく映画監督の井上昭さんの四名の方々でした。このうち、長谷川さんと井上さんは原稿を書いて頂き、西岡さんと森田さんについてはインタビューをしての聞き書きとなりました。

長谷川さんは九十歳で、激戦地ビルマからの帰還兵であり、戦後依田先生宅に通い、シナリオを学ばれ、今回の原稿では、依田先生のルーツからお住まいのこと、お母様、奥様にもふれて頂き、大変貴重なお話を書いて頂きました。

美術監督の西岡さんも九十歳であり、嵐山のご自宅にうかがい、依田さんとの思い出話を訊きました。大映京都時代は必ず溝口組の撮影現場を見に行かれたとのことですが、当時、直接には依田さんとの交流はなかったようです。依田さんとは後年、映画の市民講座を通して懇意にされたそうで、中でも同時期に製作された同じ利休をテーマにした映画（西岡さんは勅使河原宏監督『千利休』の美術を担当され、依田先生は熊井啓監督の『千利休 本學坊遺文』の脚本を担当された）にまつわる楽しい思い出話を主にして語って頂きました。

撮影監督の森田さんは、やはり大映京都時代は既に依田先生は雲の上という存在だったとのことですが、ただ一度だけ撮影助手としてついた『新・平家物語』の撮影現場における、ずっと現場に立ち会っておられた依田先生の話をはじめ、後に依田先生の誘いにより、大阪芸術大学映像学科の教師として参加された際の、依田先生とのお酒を介した愉快的コミュニケーションの話をうかがうことができました。

映画監督の井上さんは、監督と脚本家という立場での付き合いはなかったものの、『山椒大夫』や『近松物語』などの名作の撮影現場に助監督として参加する機会が多かったことから、現場における依田先生の姿を鮮明に覚えておられました。中でも溝口組では『黒板タイム』と呼ばれる恒例行事とも呼べる時間があり、黒板に台詞などを書きながら、撮影前にステージで繰り広げられる溝口監督と依田先生とのディスカッションを、スタッフの様子を含めて、生き生きと伝える原稿を書いて下さいました。

こうして何とか京都担当としての役割は辛うじて果たしたかと思ってはおりますが、もう十年も早くこの作業に着手しておれば、依田先生と縁の深い方々がまだまだご存命であつたであろうと惜しまれます。とはいえ、今こうして依田先生の業績を収集し、証言を得るということは、必ずや若き映画人の指針、財産となると考えています。

《今後のデータ利用、展開》

まず収集物とデータベース化した資料の整理・分析をした上で、「脚本家・依田義賢展」の開催、作品・解説・証言集等の出版、本学ほたるまちキャンパスで「依田義賢記念展」を企画・作品や写真、関連物の展示をして、依田義賢の作品と功績、本学で果たした役割を広く世に知らしめ、「脚本家・依田義賢」を長く記憶に留めるよう努めて行きたい。

その為には、今後全ての収集物・データの継続的かつ詳細な分析・研究が必要だと思われる。

《参考》

収集作品・目録・証言・スチール・アルバム・挿絵の殆どを整理・保存及びデジタル化済み。

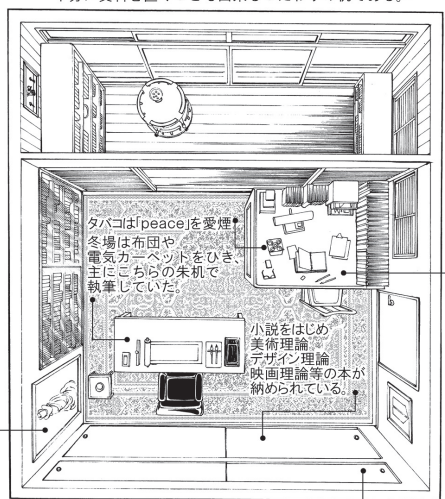
発表時期：資料収集、データベース化、分析後。25年秋（予定）

形態：大学映画館にて、収集過程やデータ化したものを映像で紹介、報告・シンポジウム。

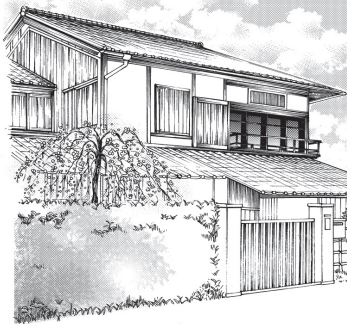
以上

依田義賢の仕事部屋

特注で大工に拵えてもらった机。
奥行きがある為、執筆するスペースだけでなく
十分に資料を置くことも出来るこだわりの机である。●



- 渡岸寺の観音菩薩の立像の等身大の写真が飾られている。執筆に行き詰った時は観音菩薩に手を合わせたこともあったのだろうか。
- 5.60年に渡る日記がぎっしりと納められている。「雨月物語」等の制作の苦惱から祇園で遊んだこと等が綴られている。



自宅

元々「赤壁の山水」と呼ばれた日本料理屋だった。それを依田の母が気に入って住宅に改装した。

書庫

自宅の二階の一番奥の部屋。照明がないため、懐中電灯で照らしながら奥へ進む。書庫には執筆したシナリオや資料の本が床から天井までびっしりと並べられている。

